

ポストモダンな 学びのスケッチ

(3)

繋がりの中で見えてくるもの

北村真也+中村正

これは筆者である北村がたまたま大学院に学び、そこでたまたま指導教員であった中村先生に出会ってしまったことで描き始められた終わることのない学びのスケッチである。論文課題を抱えていた筆者は、毎週のように中村先生と2時間の対話の時間を重ねていた。それはいつの時もほぼ正確なリズムをそれぞれの生活世界の中に刻むかたちで行われた。金曜日の夜、場所は衣笠キャンパスの研究室もしくは朱雀キャンパスのカフェ。そしてこの対話の時間は、いつしかそれぞれの生活世界全体にある特有の意味を構成することになっていった。

この感覚は、実に不思議な感覚だった。そもそもこの対話は、論文指導の一環であるオフィスアワーという名目で始まった。それは学生である筆者が、指導教員である中村先生から何らかのアドバイスを受けるためのものであった。しかしこの対話が「指導」というフレームを超えるのに時間はかからなかった。筆者のための指導が、二人にとっての学びの時間にとって代わったのである。ここでの学びは、ライブである。W.ベンヤミン流に言えばまさに「アウラ」なのである。出会い頭に何か生まれ続けていくような世界。この場のこの瞬間にしか生まれ得ない気づき、変容、そして学び。私の学びと中村先生の学びの輪郭が解け始め、共有された学びになり、その学びがこの対話の場を超えてそれぞれの生活世界に溶けだし、そこに変容を生じさせていく。そんな過程が、特有の意味世界を構築するのだ。そんなわけで、今日もまた二人の学びの時間が重ねられていく。それは決して答えの出ない学びであり、予定調和でない学びの世界。しかし、決して閉じることのない開かれた学びの世界。そんな世界を少しでも感じていただければ幸いである。

エピソード

私は京都府主催の講演会で精神科医の斎藤環さんと一緒に話をする機会を持ちました。その中で斎藤さんのコトバを私は取り上げました。今回の先生との対話は、そのテーマから始まりました。

コミュニケーションの機会が増えれば増えるほど、人と人との関係性は薄くなっていく。そして、関係性を築いていくのは 生身性 でしかない

「今、北村さんが言った“コミュニケーションが増えると、関係性が薄くなる”って話だけど、現場のリアリティー、一緒に過ごしている雰囲気とかね、においとかが、身体の表情とか、そんなものを加味していくと「つながりあう」というコトバが、どう見えるかやね。「つながりあう」というコトバは、いろんな多義性を持っているので...、身体

話 ってるでしょう。とても日本語的かもしれないけれど、これってとても共感的ですよ。つながりあう っ てコトバは、これとどう違うのか？こんなのが、次のエピソードの足がかりになるかもね」

「あの私が書いた中に『話がつうじない』ってエピソードがあるでしょ、エピソード 39、これ読んでみてください」

「K君のこれね。北村さんは フレームの違い と表現してますよね。でももっとコトバがほしい。これきっと、K君との関係がこれからも展開していくでしょうから、その中で北村さんのコトバもどんどん変わっていくと思いま すよ。どこかで フレーム というコトバを使わなくなるかもしれない」

「そう言われれば、この フレーム というコトバも最初は使ってなかったように思います。今回書いてきた 5つ のエピソードには、この フレーム というコトバがよく出てくる。きっと私は、今、この フレーム というコト バにフォーカスがあるのでしょうか？」

「何が フレーム として浮上したんですか？」

「アスペルガーのM君のこととか、ひとりであることが好きというY子ちゃんのこととか...、それが私の目の前の こととしてあったんですよ。要するに...」

「そことシンクロしているわけだ」

「そうです。彼らとの対話を通して、“わからない、理解できないから問題だ”って考え方が、とても身勝手なこ とだと思えるようになっていったんです。このY子ちゃんのことでもそうですけれど、私がお子さんを問題の子として見な かったことで、その子が話をはじめますよ。そしてその子が話し始めることで、私は聞こえるようになっていくん ですよ」

「それ書いてある？今の言い方とてもよかったです...」

「書きましたよ。エピソード 36 と 38 ですね。つながってるんですよ」

今回書いたエピソード 35 40、そこに登場する内容は、子どもたちのことであったり、保護者のことであ ったり、アウラの先生のことであったり、その対象、そして内容は全然違うものでしたが、それらを買 くものとして、私がそこにいるのです。この時の私の頭の中には、「フレームとは何か」という省察がメタ レベルで常に機能していたのかもしれませんが。私の視野に立つと、この命題のもと次から次へといろんな 出来事が起こってきたのかもしれませんが。あるいは、私がそれらの出来事をこの命題に基づきながら編集 していったのかもしれませんが。そして私の新たな考察は、再び現場の中に返されていく。そうしてこれら のエピソードは成り立っているのかもしれませんが。

「北村さんは、アウラの卒業生まで面倒みてるんですか？それに、うちの大学の学生まで指導していただけるみたい で...」

「いや、そんな面倒みているって、そんな感じでもないんです。話していると、歯がゆい部分があって...」

「でもいいよね、そうして卒業生たちとかかわりがあるって」

「彼らは知ってるでしょ、塾長が大学院で研究活動をやってるって」

「ええ、だってよく話しますもん。でもね、エピソードにも書いたんですけど、大学の公務員講座、年間かなりの 時間があるでしょ。大学に入学してまた安直な受験勉強をする。これって何なんですか？大学って何なんですか、 って思うわけですよ」

「確かに...、難しいんですよ、我々も。一応私学は就職の面倒見がいいということになってるからね。就職の面倒 見がいいというのは、本来の意味での キャリア教育 を埋め込まないあかんのですが、まだそのモデルがないので、

どうしても受験ノウハウの獲得のような安直な方向に流れてしまうんだよ。でもね、しばらく 空白の数年 が続くと思うよ。就職状況が厳しいからね。逆にそうして流れてしまう、大学も結果としてそれに加担してしまうその中で魂が入らない。動機が分からないというか、何のために公務員になりたいのか、そういうものが入らないままの状態です。そうなるとうっ面だけになっちゃうからね。結果として社会にとっても良くない」

「絶対そう思うけどなあ...」

「いや、これはひとえに私の責任なんだよ。教学担当としての...」

「だから、何とかしようと思ってるんでしょ？」

「そうですねですよ」

私がエピソードで取り上げたK先生の話、これを元にしてこの対話が始まりました。私はK先生が大学に入学してからも、公務員試験受験のために断片的な知識を習得するような学びの姿勢に強い違和感を感じるとともに、「大学っていったい何なのか」という疑問を抱きます。社会が厳しくなればなるほど学生たちも大学も安直な方向に進んでいこうとする現実を大学の運営者である中村先生につきつきます。先生は、そんな私の指摘を真摯に受け止めながらも、現実の葛藤の断片を対話の中で表現するのです。つまりこの場面においては、アウラと大学という異なる場を運営する立場にある二人が、その当事者として共有された課題を見つめるのです。

「私は、書いてて思うんですけど、エピソードの題材はいっぱいあるんです。いろんな登場人物が入れ替わり立ち替わりそこに登場するんです。でもね、私が考えていることは、とてもシンプルなんです。中村先生もいろんな話をされますけど、その話を通して伝えようとしていること、これもとてもシンプルなように思うんです。たとえば「さっきの話の中にあつた“魂が入ってない”なんて表現、これって先生の中心に近いメッセージだと思うんです。これを聞きとる力、あるいはこれを語る力、そんなものが、今の学生たちに最も必要だと思うんです。でも、今の教育は、その反対。断片化された情報をまだ効率よく習得させることを目指しているように私には思えるんです。これでは、学習者の中にシンプルなメッセージがいつまでたっても構築されないように思うんです」

「北村さんの言う“シンプルなメッセージ”って何だろう？」

「たぶん、階層的な思考の奥にあるものかもしれません。そう、そこには、階層性があるんです。幾層もある階層が...。そしてこの階層は他者との出会い、つながりあいの中で構成されていく、その表面にはコトバであるとか、行動であるとか、具体がある。奥の階層へ行けばいくほど、目に見えなくなる。その目に見えないところにうっすら輪郭のように感じられるもの、それがその人のシンプルなメッセージかもしれない。でもこのシンプルなメッセージも、固定されたものじゃない。その輪郭は、絶えずアメーバのように揺らいでいる、でも揺らぎながらもある形を表現する。そこを理解できないといけないうように思うんです」

「それ書いてくださいね。番外編に...」

「でも、そう思いませんか？これって、とても大事なことだと思うんです。私は フレーム という表現をさっきから使ってきましたが、他者とつながっていくためには、そのフレームをどんどん可変しないとイケない。チューニングです。これ言い表現かも...、チューニングができるだけの階層性があること、可変性があること、これ大事ですね。この条件がそろえば、他者とつながることができる。そしてつながれば、また新しい層が形成される。こうして、どんどん層が増えていくわけですよ。無限に増えていくのかもしれない。でも、それらは決してバラバラじゃない、私の中で、いくつかのフレームを束ねるフレームが新しく構成される。そこには何らかの一貫性がある。用意された一貫性ではなく、そこに一貫性があることに気づく。ひょっとすると、この一貫性が 私自身 なのかもしれない。私が、私に気づく瞬間。そして、この一貫性が、シンプルなメッセージなのかも知れません」

「そうかもしれませんね」

「きっとそうなんです。他者とつながるためフレームを変えていく、チューニングするためには足場がいるんです。そしてこの一貫性が、私の足場になる。だから、どんな人とも、所属している領域が違って対話ができるし、つながれる」

「どこが違うんでしょうね。北村さんのようにできる人とそうでない人...」

「先生は、できるでしょ」

「私は“多動”だから、多動だからできるんですよ。広いから、注意散漫だから...」

「先生は、私も多動だと言ってましたね。仲間ですね」

「まあ、“多動”というメタファーで表現されるもの、“縁（ふち）”、絶えず何かをずらしておかないと...、中心にいて同じ所で凝り固まりたくないんですよ。絶えず斬新な発想がほしい。そのためには“縁（ふち）”に行かないといけない。“縁（ふち）”には“縁（えん）”があるわけだから、なにかつながっていく。中心にいない、“脱中心”。自分を“異化してくれる”ものを絶えず求めている」

「いろいろコトバが出てきましたね。メモしておいてください(笑)」

「何、言ってるんですか(笑)。“多動”は広がりがあるから、その“縁（ふち）”に出会いが生まれるんですね」

「まあ“多動”と言ってるけど、私なりの方針がそこにあるんですよ。“異化”に向かうための方針。むやみやたらと動いているわけじゃない。ピンボールマシンで言うと、500点の場所がわかる。10点ではあまり意味がない。どこに行けば相手とぶつかって火花が出るのか、それをいつも考えている。それは自分を異化してくれるものだから...」

先生との対話は、どんどん深みに向かって進んでいきます。私が投げかけた“シンプルなメッセージ”、それをめぐって、私自身が語りを始めます。その語りにもるで感応するかのように、先生の語りが始まり、それは二人の間のつながりをより太く紡いでいきます。つまりここでは私と先生は、同じ命題についてそれぞれの語りを持って表現しているのです。二人の対話はさらに続きます。

「ということは、中村先生の根底には、自分を異化したい。私の表現で言えば自分を変容させたいという思いがあるんですね」

「いっしょです」

「何で異化したいんですか？」

「山岳部だったからです。山に登るといろんなものが見えてくる...。山岳部は文系なんです。ひたすら哲学クラブなんです。山に登ると“なんで山に登るのか”という問いに答えなくちゃならない。山に登りながら答えの出ないことを考える」

「自分を知りたいということですか？」

「そうとも言える。答えの出ることは、簡単なので、それはただやればいい。ただ身に付くだけなんで。答えの出ないことを考え続けるためにも、基礎体力、基礎学力がいる。でも先人たちはみんな考えてきたわけだから、勉強しなくちゃいけないと思った。こういう知の塊を 命題的知識 っていうんですが、「AはB」であるという知識は内面化するしかない。体系的にたくさんあるからね。ただ、命題的知識だけでなく 手続的知識 いうものもあるんです。その並べ方ね。応用の仕方、あるいは別の問題に転換する方法。やり方を内面化する。これはこれで鍛えないといけないですよ」

「今、私たちがやってみるみたいだね」

「そうそう」

「山岳部で鍛えられた手続的知識はね、まず短波放送を聴いて気象を理解する気象学的知識と草花の知識とか、インターハイに毎年出たので、それに勝つための知識、あるいは部員を獲得するための知識とか、そんなのね」

「そんなことで先生は鍛えられていったわけですね」

「そう、それを応用していくと、大学ではテキストに命題的知識があって、手続的知識としてはゼミだったり、インターンシップだったり、あるいは海外に出て行ったりとかそういう機会があるわけ。でもそれは体験だから、それを手続的知識として収めなければいけない」

「経験化のプロセスですね」

「だから、K先生なんかは、公務員試験をそんな風にしか見えないっていうのは、まだ知の体系が出来上がってないんだろうね。手っ取り早くつまみ食いしていくような、既存の知識の中で処理しようとするから、当然受験勉強のようにしか捉えられない。革命が起こってないんですよ。革命が…。学習革命が起こらないといけない。これを脱学習(Unlearn) っていうんですよ。古い学習の形態が変わっていかないといけない。そうしないと上塗りしていくだけ、自分のフレームの中に収めて公務員試験がやってくるだけ。学習革命が必要なんです。これを大学4年間の中でやっていかないといけない」

「そういう認識と言うのは、大学の教員間の中で共有化されているんですか？」

「されてない…」

「そうですね」

「それは以前もそんななかったんだけど、社会の中にそんな機会があったんですよ」

「学生運動だったり…」

「酒飲んで、人生を語り合ったりね」

「そう、それに以前は大学への進学率も低かったから、それなりの人間が集まってきた。でも今は大学も大衆化してきたしね。そういう社会装置もないしね。それを意識的にやらんといかん。それにまだ大学はおいついてない」

「なるほど、でもそんな状況だったら、教員を教育しないと…」

「それ、私の仕事なんですよ」

「という中で、例の 学習科学 とか 学び学 とか、私なりに理論武装していかないといけないんですよ。私なりに身につけないといけないんですよ。でも言ってることはそんなに難しくなくて、私自身が体現してきたことですからね」

「それは私も同じです」

「そうですね、だからアウラの森もきっとそういう側面ができあがっているんでしょうね。意図して作ったんですからね。何かそれは既存の学校に対するオルタナティブであったりするんでしょうね。学校でもなく家庭でもない、そういう場がそこにある。環境 と言ってしまうと抽象的すぎる。もう少し特定化していった方がいい。デザイン と言ってしまうと少し操作的になる。だから、本人たちが語る身体語って大事なんです」

先生の学びの世界の原点は、山岳部での体験にあったこと、それを体験にとどめず経験化していく過程の中で先生は自分自身の学びの型を構築し、大学にいったからもそれを応用させていったのかもしれない。私から見れば、先生の学びの型は実にダイアログ的です。ある特定の領域にとどまることなく、その縁を通して常に他の領域とつながりながら広がり、また統合されていく。しかも、このダイナミズムは常に学習者である先生自身を軸としておこっているように感じられました。モノログではなく、ダイアログ、対話的なつながりの中に成立する学びなのです。

「私は、生きているということの証は、代謝をおこなうということだと思ふんです。それは、外の世界とのやり取りです。やり取りであるということは、モノローグ的な一方通行ではなく、ダイアログ的な対話なんです。人間の場合、それは物質にとどまらず、情報や感覚、あるいは心って言うてもいいかもしれんが、精神的なものでやり取りをするんです。そしてこれが、学ぶことの原点です。だから私にとっては、学ぶことは生きるということとイコールなんです。私がアウラを作ったのは、小さな子どもは好奇心に満ち満ちているのに、彼らが学校に入るととたんに学ぶことが強制されるもの、嫌なものに変わっていき、その好奇心が消えていく。この現実を何とかしたいと思ったからです。彼らの学びの認識をそれこそ覆したいわけですよ。学びは、自分自身と外の世界との統合であり、広がりであり、それは十分に好奇心を満たしうるものであるということを実感できる教育を想像したかったんです。でもK先生の学びは、そうやってないバラバラに分断された情報を、ただ効率よく記憶したり処理したりする範囲にとどまっている。それでは、好奇心を満たすことができないんですよ。せいぜいテストの結果とか受験に合格するとか、他者の評価を前提とした満足しかない。学んでそんなことじゃないんです」

「まあ、今までの求める人間像が、それでよかったのかもしれないなあ。でももう時代に合わなくなっている」

「かもわからないですね。そう思います」

「そういう時代の意識がそこにあるんだろうね。それがよく見えるんだろうね...ということも、書いてください。番外編に...。そうすることで読み手は北村さんの考えていることやっていることをよりよく理解するでしょうし、北村さん自身もアウラの森の主催者として、マイスターとして、よりよく出来上がっていくのかもしれない」

「それはそう思います。こうやってしゃべっていることそのことが、私のいでたちそのものを変えていってるんだと思います」

「単に外から来るようなものでもなく、元々北村さんが持つてるものだろうけど」

「でもこんな風には書きすすめると、どんどん深くなりますね。深くなればなるほどわくわくするじゃないですか」

「そうですよ。だからおもしろい。私はチャレンジャブルですから、課題が大きければ大きいほど、チャレンジャブルになっていくんですよ。私は困難とともに生きてるんですよ。それに職責上のこともありますしね。私のところへ上がってくる問題は、課長や部長や次長で解決できなかったことばかりですから、常に困難なものばかりなんです。メタ的な視点がなければ、処理できないことばかりなんです」

「そうなんですよ。でもその大学の問題とここで私と対話していることは、どこかつながりがあるわけですね」

「もちろんそうですよ。単にフェーズの違いだけで、同じことでしょうね。私の中で一貫性がないとこれだけ多面的な仕事はできないですよ。“縁(ふち)”が好きなんです。絶えず自分を異化してくれるものしか興味をもたないからですよ。真ん中には、つながないんですよ。“縁(ふち)”には“縁(えん)”があるんですよ」

今日の対話がここで終了となりました。こんな風に対話を続けていけばいくほどに、私はより中村先生に出会っていったように思います。そしてそのことは同時に私がより私に出会っていくことなのかもしれません。先生との対話の場面で、私は私なりの学びを表現し、そこで表現された学びは、アウラの実践に影響をもたらす、それを記述したエピソードが再び先生との対話の媒介となります。この循環が、まるでらせん階段のように進行しているのかもしれません。